島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第25巻　1頁～10頁　平成3年12月

二台のピアノによる実践教育について　II

吉名　重美*

Shigemi YOSHINA

A Practical Education with Two Pianos II

I　緒　　論

Piano Duo の魅力について一言で述べる事は，難しいと考えられる。しかし，次の梅津時比古氏の言葉からもわかるように，*Duo* の二人の心の感覚の共有を他人に伝達することであると思える。

“音がふと連れてくるものは，何なのであろう。たったひとつの音や和音から，ある感覚や感情が胸に広がることがある。とても繊細なものであり，気づかぬうちに包まれ，言葉を与えようとすると，葉を駆ける雨のしずくのように，消えてしまう。詩人のクロードも，周りをめぐるだけで，それを名付けられなかった。

それはメロディーのように
ひっそりと私の感覚に流れ
春の花がひらくように
香りがほのかにただようように
だが言葉が来てそれをとらえ
目の前に見せると
灰色の霧のように色あせ
吐息のように消えてしまう。”

このようにはかなく，かそけき感情の伝達は，何を創造するのであろうか。*Piano Duo* を二人でする行為は，上記で表現されている音覚とでも呼ぶべきものを，合奏で作り上げる事である。

この小論では以上のことにふれながら，*Béla Bartók* の*Piano Duo* の曲を中心として，*Duo* の楽しさと魅力，そして筆者が学生と何故*Duo* の演奏会を行うかについて論及する。つまり前論文においては精神的内面性の充実から論じた。今回は技術的面の充実を，先達のテクニックから学ばせる為にこの観点から論じる。

＊島根大学教育学部音楽研究室

II　考　　察

2－1　*Duo* 曲について

Piano Duo の作品は，前論文[*1]の歴史の部分でも述べたように，古くから多くの作曲家により作曲されている。しかし*Duo* の作品は，筆者が学生と一緒に研究・演奏を行った1987年から1992年の演奏曲目（IIIを参照）からも推察できるように，①作曲者自身が二台の*Piano* 用に作曲した作品と，②作曲者以外の音楽家が二台の*Piano* 用に編曲した作品に大別できる。そこでこの小論では，上記の演奏会で演奏した作品の中から，特に二台の*Piano* 用に作曲者自身がアレンジした作品《*Seven pieces from “Mikrokosmos” by Bartók*》について考察を行う。紙面の都合上②については，稿を改めて論及する予定である。又この小論は学生との*Duo* の実践・研究であるから，曲目の細部にわたる分析は行わない。

2－2　作曲家（*Béla Bartók* 1881－1945）について

ハンガリー生まれの作曲家であり，*Z.Kódaly*（1882－1967）と共にハンガリー民族音楽の収集及び研究で世に知られている。1881年にナジュセントミクローシュに生まれ，その後ポジョーニに居を移した。先輩の*E.Dohnani*（1877－1960）から感化を受け，*F.Liszt*（1811－1886）が1875年にブタペストで創立した「王立音楽アカデミー（現在のハンガリー国立音学院）」に1899年に入学した。1903年にアカデミーを卒業し，1907年にこのアカデミーで教授として教鞭をとった。1940年に渡米し，ニューヨークで1945年に亡くなった。

2－3　*Bartók*の作品について

《*Seven pieces from "Mikrokosmo" by Béla Bartók*》
(*Arranged for two pianos* (4 *hands*) *by the composer*)

1. *Bulgarian Rhythm* (*No.* 113 *Bulgarian Rhythm in "Mikrokosmos" vol.* 4)
2. *Chord and Trill study* (*No.* 69 *Chord study in "Mikrokosmos" vol.* 3)
3. *Perpetuum Mobile* (*No.* 135 *Perpetuum Mobile in "Mikrokosmos" vol.* 5)
4. *Short Canon and its Inversion* (*No.* 123 *Staccato and Legato in "Mikrokosmos" vol.* 5)
5. *New Hungarian Folk Song*(*No.*127 *New Hungarian Folk Song in "Mikrokosmos" vol.* 5)
6. *Chromatic Invention* (*No.* 145 *Chromatic Invention in "Mikrokosmos" vol.* 6)
7. *Ostinato* (*No.* 146 *Ostinato in "Mikrokosmos" vol.* 6)

(　) の中の記述は《*Mikrokosmos*》の番号と題名である。

《*Mikrokosmos*》の中の作品には，今回この小論で取りあげる《*Seven pieces from "Mikrokosmos"*》の他に，第2ピアノのパートが用意されている曲が4曲ある。つまり次の*Duo*曲がある。列挙すると以下のとうりである。

No. 43 *In Hungarian Style (a) in "Mikrokosmos" vol.* 2
No. 44 *Contrary Motion in "Mikrokosmos" vol.* 2
No. 55 *Triplets in Lydian Mode in "Mikrokosmos" vol.* 2
No. 68 *Hungarian Dance in "Mikrokosmos" vol.* 3

上記の4曲の作曲理由は，《*Mikrokosmos*》の序文*2の中に述べられている。

"生徒には，できるだけ早くから，演奏会用の楽曲を演奏する機会をあたえることが大切であるから，こうした曲では，ぜひとも2台用の曲として学習させることが望ましい。"

又以下のように解説されている研究書*3も存在する。

"*If only one piano is available,transpose the primo (Piano* I *)part two octaves heigher and play with another pianist as a duet for four hands*"

以上の観点からも，*Bartók*が《*Mikrokosmos*》の中の作品7曲を選び，*Duo* を作曲した理由が推察される。

《*Seven pieces from "Mikokosmos"*》の*Duo* の作曲スタイルは，3つに大別できる。

1．二人の奏者が原曲（以下《*Mikrokosmos*》での曲を便宜上原曲と記述する。）を分担して演奏する。つまり大部分の場合，原曲の右手部分を*Duo* 曲（以下《*Seven pieces from "Mikrokosmos"*》での曲を便宜上*Duo*曲と記述する。）の*Piano* Iが，そして原曲の左手部分を*Piano* IIが分担して演奏する型。

2．原曲の伴奏部分を*Piano* IIが演奏し，原曲の歌唱部分を*Piano* Iが演奏する型。原曲は歌詞付きである。

3．原曲を*Piano* IIが担当し，*Piano* Iに新たな曲を創作して加筆した型。

1の型について

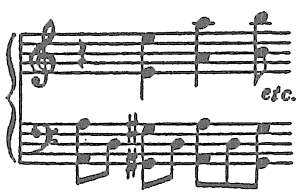
この型に属する曲は，《*Seven pieces from "Mikrokosmos"*》の中の*No.* 1，3，4，6，7である。しかし，*No.*7は3型の分類にも入れることが可能である。

*No.*1. *Bulgarian Rhythm*

筆者の論文「ピアノ教則本についての考察I」*4で論及したように，古いスタイルの教則本で音楽技術の習得をした学習者にとっては，原曲は練習しずらい曲(今までの練習では以下の理由で習得しずらい）と考える。

原曲は1小節中に8分音符が7つ入った 7/8 拍子である。それ故に，感覚的にとらえにくい曲ではないかと推察する。その為に*Bartók*はこの曲の補足練習としての曲を，《*Mikrokosmos*》の第4巻の巻末に付している。そして注記*5として下記のことを付している。

"*The repetition can be played in this way*:



with octaves throughout. In this case, the "seconda volta" shall be played louder than the "prima volta." In order to develop the sense of rhythm it is recommended to play the piece as follows: two players (the exercise is useful even for more advanced players) who are able to play the piece perfectly, shall play it as a piano duet, the second player playing the three introductory and the six closing bars and the accompani-

ment doubled in the lower octave (with both hands), the first player playing the melody doubled in the upper octave. Both parts should be studied by each."

Duo 曲は上記に述べた《*Mikrokosmos*》での演奏指導法が，より理解される為に作曲されていると考える。前半部分では，*Piano* I は，原曲右手部分の旋律を，右手・左手単旋律のユニゾンで演奏する。後半部分は，右手・左手オクターブのユニゾンで演奏される。*Piano* II は原曲左手部分が，4小節から上記の《*Mikrokosmos*》の注記で述べられた方法で演奏される。原曲のリズム感が*Duo* 曲ではよりよく鏡映され，演奏者二人の心の躍動を表す曲であると考える。

No. 3.　*Perpetuum Mobile*（楽譜参照）

原曲は《*Mikrokosmos*》の*No.* 134の練習曲の仕上げの曲で，指の訓練の為の練習曲である。重音で常に*Legato*で奏し，トレモロが要求され，最初から終わりまで同じ速度で演奏する曲である。題名どうり*Perpetual Motion*である。

Duo 曲は以下の方法がとられている。前半部分では，*Piano* I は7小節2.5 拍まで原曲と同じに演奏し，*Piano* II は，*Piano* I を1オクターブづつ下げて演奏する。それ以降から前半の終わり（20小節）までは，原曲を左右に分担して演奏する。つまり*Piano* I は原曲右手部分を，*Piano* II は原曲左手部分を演奏する。後半部分は前半部分と同様に演奏する。絶えまなく動く指の感覚が，動的な子供（筆者の独断によれば，彼の息子をイメージさせる。）の心のような動きを感じさせる曲であると考える。

No.4.　Short Canon and its Inversion

原曲は2つの奏法（*Staccato*, *Legato*）の交錯した練習曲であり，交互に混じり合わされることで困難さの度合いが増すと考える。原曲はa，bと2曲が用意されている。aは右手が先に始まり，左手が右手を模倣して追いかける。bはその逆となる。この曲は*Staccato, Legato*の指のタッチにおける鋭敏な感覚や，両奏法を素早く変化させていくため，指のコントロールが要求されている。両奏法の組み合わせにより，滑稽さが感じられる曲と考える。

Duo 曲は原曲a，bを続けて演奏する。前半部分は原曲aの部分を，後半部分は原曲bの部分である。前半部分では*Piano* I が原曲右手部分をユニゾンで，また7小節から右手がオクターブになる。*Piano* II は原曲左手部分がほぼ同じ方法で演奏される。後半部分も原曲に忠実であり，前半部分とほぼ同様のスタイルをとっている。*Duo* 曲では，原曲の指のタッチの変化を演奏者がより明確に感じとることができると考える。

No. 6.　*Chromatic Invention*

*Bartók*は*J.S.Bach* の行った作曲技法（対位法）を取り入れた作品を，《*Mikrokosmos*》にも多く挿入している。この曲と同じ題名の曲は，《*Mikrokosmos*》第3巻（No. 91, No. 92）にもあるが，この曲は前曲よりスケールが大きく，より高度な技法によって作曲されて精巧な作品であると言われている。第22，35，48小節で一時的に2/4拍子が変わる。この拍子の変更に注意を向ける事を要求されていると考える。原曲はa，bと2曲用意されている。

Duo 曲は原曲a，bを同時に演奏するように書かれている。つまりNo. 145aを*Piano* I が，No. 145bを*Piano* II が担当する*Duo* 曲である。上記に述べたNo. 1，No. 3，No. 5とは違った*Duo* 曲の方法であると考える。しかし原曲を二人で分担して演奏する形なので，ここに含めて考える。あやとり糸がほんの些細な間違いから，無秩序状態となる。しかし整理されて演奏できた時は，原曲の音楽性がより増幅される曲であると考える。

No. 7.　*Ostinato*

原曲は即興曲風な踊りの為の曲で，田舎の音楽師と農民達の陽気なお祭りの様子が感じとられる，と言われている。この曲は，*Bartók*の民族音楽家としての側面がよく表現されていると考える。そして様々な楽器を思い起こさせる曲である。つまり荒々しいリズムで太鼓のように響く低音，弦楽器での演奏を思わせるような旋律，明るい響きの管楽器，バグパイプと表現豊かな曲である。和音の執拗な*Ostinato*が使用され，その*Ostinato*の上に，民謡（*Bartók*自身が作曲したと言われている。）を歌いあげて，熱っぽい舞曲がより効果的に感じられる。演奏会向きのにぎやかな曲であると考える。

この*Duo* 曲は《*Seven pieces from "Mikrokosmos"*》の終曲にふさわしい曲である。大部分の小節では原曲右手部分を*Piano* I が，原曲左手部分を*Piano* II が分担して演奏される。この*Duo* 曲はNo. 3の*Piano* I で創作されたスタイルに似た旋律を，*Piano* II の右手部分に32小節から付している。これにより，原曲よりはるかに表情豊かな表現が可能となっている。この作品は，一台のピアノでは味わえない音楽の幅を，可能にしていると考えられる曲である。

2の型について

この型に属する曲は，《*Seven pieces from "Mikrokosmos"*》のNo. 5である。

No. 5. *New Hungarian Folk Song*（楽譜参照）

原曲は歌詞付きである。*Bartók*は《*Mikrokosmos*》の中に歌詞付きの曲を，この曲の他に3曲挿入している。

No. 65 *Dialogue in "Mikrokosmos" vol.* 2

No. 74 *Hungarian Song (b) in "Mikrokosmos" vol.* 3

No. 95 *Song of the Fox (b) in "Mikrokosmos" vol.* 3

*Bartók*が歌詞を付けた曲を《Mikrokosmos》に挿入した理由は，《*Mikrokosmos*》の序文*2にも述べられている。

"歌詞のついているパートと伴奏譜という形での曲も4曲あるが，器楽の勉強というものは，適切な歌唱指導から発展すべきであると考えられているところから用意した教材である。そういう方法で勉強を始めれば，歌いながらひくというこの形のこういう曲を実習する事はそれほどむずかしいことではない。こうした曲では，ふつうのピアノ曲の大譜表による楽譜の代わりに3段の楽譜を読譜することになるが，生徒が歌いながら，同時に伴奏を弾くというこの形は，きわめて有用な実習であるということができる。第74曲と第95曲も同じような形になっているが，この両曲の場合には，まず最初に独奏曲として練習し，そのあとで，歌とピアノという形で実習して欲しい。"

又巻末の注記*6として，以下のように書かれてある。

"*a)The same performer singing and accompanying himself.*

b)On two pianos,the first player playing the melody by doubling the octave,the second player playing the original accompaniment.

c)For violin and piano.The violinist plays the first verse in the original position,the second in the higher octave."

Duo 曲では*Piano* Ⅰに原曲の歌唱部分をユニゾンで，*Piano* Ⅱは原曲の伴奏部分を演奏する。原曲の伴奏部分の第2拍と第4拍にアクセントが付してある。このアクセントは，ハンガリー語特有のものと同じであると言われている。原曲の場合，歌唱部分が左手のアクセントに惑われやすいと考える。*Duo* 曲の場合には，その点が解消され，演奏が容易になると考える。そしてハンガリー語特有のリズム感は，原曲を*Duo* 曲にすることで，より理解されると考える。その故に二人の気持ちの高揚（演覚・音覚の発展）を，誘導するような曲であると考える。

3の型について

この型に属する曲は，《*Seven pieces from "Mikrokosmos"*》のNo. 2である。

No. 2. *Chord and Trill study*（楽譜参照）

原曲名は*Chord study* である。*Chord study* は何を目的としているのであろうか。その目的は，和音の正確な演奏法（和音での手の形，指のバランス，手首の弛緩）と和音により作り出される旋律の把握であると考える。その為に*Bartók*はこの曲の補足練習としての曲を，《*Mikrokosmos*》の第3巻の巻末に付している。原曲は基本形の3和音で，隣り合わせの鍵盤の方に動いていく平行進行のリズミカルな伴奏と，それに対照的な真面目さを感じさせるメロディーとの組み合わせを，いかに表現していくかでこの曲の面白さが演出されると考える。

Duo 曲では*Chord study* の他に*Trill study* と題名を付している。和音の練習だけでなく，もう一つの要素を含ませていると考える。*Duo* 曲では原曲を*Piano* Ⅱが受け持ち，原曲右手・左手に現れる単旋律をオクターブで演奏する。*Piano* ⅠはG音を中心にしてトリルをユニゾンで演奏する。筆者はこの*Trill* を，主旋律（*Piano* Ⅱ）に対して相競うかのような形をとる原曲に対しての旋律的伴奏と考える。原曲の和音進行とメロディーの組み合わせに，*Trill* を付すことにより，原曲の持つ味が多様に変化していくかを感じる曲であると考える。つまり*Chord* と*Trill* で，縦軸と横軸によって表される平面を，より鮮明にする感じの曲であると考える。

この節の最後に以下の事を付記しておく。

《*Mikrokosmos*》について種々の解説書も存在するので，ここでは詳しく述べる必要はないと考える。《*Mikrokosmos*》は*Bartók*のピアノ曲の作風の特徴が集約的に表れている。この特徴を簡略に述べると，若いピアニストの為に現代音楽の演奏法や，譜面の読み方を習得・練習・研究をするための教則本である。又彼自身の子供の音楽教育の為に作曲されたと言われている。各曲はその曲の目的が，曲名によって明確にされていると考える。そして筆者の「ピアノ教則本についての考察Ⅰ」によっても言及している，音楽の三要素である「リズム」「メロディー」「ハーモニー」に加えて，目（視覚的）と耳（聴覚的）で，音楽を明確に理解するための曲

が手際よく配置されて，学生が学び，奏でる音楽（演奏）が正確に整理され，秩序だった練習が可能であると推察できる。

2－4　学生指導

以上の7曲を実践教育をふまえて総括（*Duo* 曲の特性が端的に秩序だっているために統一して論じ，演奏指導が容易であるためである。）して考察する。

《*Mikrokosmos*》は作曲者自身の小宇宙をまとめた系統的な曲であり，*Duo* 曲はその原曲を理解の上に成り立つと考える。従って学生指導をする場合は，特に原曲と*Duo* 曲との比較・検討を研究・演奏させる。そして原曲と*Duo* 曲の相似性と相異性を把握させる。例えば前の章での原曲と*Duo* 曲との比較で理解できる音域幅の違いと音の充足感が，「音楽性の豊かな表現を明示する」ということを考えさせる。

又，筆者が*Duo* 曲を学生と演奏する時（*Piano* Ⅰを学生に弾かせて，筆者が*Piano* Ⅱを担当する。逆の場合もある。），次のことを学生に考えさせて指導している。

1. 筆者の音がどのように聴こえるか。
2. 自分（学生）の音は*Duo* 曲の演奏で，どんな意味（役割）をもっているのか考察させる。
3. *Bartók*の意図を考察させる。
4. 上記3が自分なりに把握できたならば，それを相手に明確に伝えるように努力させる。
5. 演奏者の相互の意志伝達方法は，どのようにすれば最大限に伝わるか考察させる。

以上が理解されると，演奏技術は飛躍的に増大すると考える。そして各作品をより理解させていく為には，1型，2型，3型の*Duo* 曲の中で，特に曲名から次の様な実例を示して理解させていく方法をとっている。つまり作曲者の意図を最大限に把握する為である。

《*Seven pieces from "Mikrokosmos"*》のNo. 2において，*Chord* の訳は和音と訳されるが，もう一つの訳は心の琴線という意味も所有している。そして「*The sound struck a sympathetic chord in her heart.*（その音が彼女の共感を呼び起こした。）」という英文例からも理解されるように，音を媒介とする相互の心の共感（音感の共有）を与える練習が，この作品の題名からも推察される。一方，*Trill* は装飾音の一種であるが，もう一つは震える声で歌う，鳥がさえずるという意味も所有する。これらのことは，共鳴する音（教師と学生の共有する音）の練習が，*Duo* の練習でも重要であるという事へ導く。

この章のまとめとして以下を記す。*Bartók*・筆者そして学生の3者の心の琴線が，一致する体得を求めて精進すると考える。

Ⅲ　演奏曲目

この章で，当該音楽研究室（筆者）の活動記録として，*Piano Duo*（筆者と学生）曲の演奏曲目を列挙する。

・1987年7月7日

Mozart, W.A.: Sonate für 2 Klaviere zu 4 Händen K.v.448

Saint-Saëns, C. C.: Variations for 2 pianos on the theme of Beethoven Op.35

Smetana, F.: Sonata in one movement for 2 pianos 8 hands (Edited by Georg Kuhlmann)

Schumann, R. A.: Andante und Variationen für 2 Klaviere zu 4 Händen Op.46

Gershwin, G.: Rapsody in Blue for piano and orchestra

・1988年9月29日

Mozart, W.A.: Fuge für 2 Klaviere 4 Händen K.v.426

Mozart, W.A.: Largetto und Allegro in Es für zwei Klaviere

Bartók, B.: Seven pieces from "Mikrokosmos" (Arranged for 2 pianos 4 hands by the composer)

Chopin, F. F.: Ronds for 2 pianos Op.73

Kuhlau, Fr.: Sonatine Op.20 Nr.3（Ⅱ. *Klavier frei hinzukomponiert von August Riedel Op.18)*

Saint-Saëns, C.C.: Le Carnaval Des Animaux (Transcription par R.Berkowitz pour 2 pianos à 4 mains)

・1989年9月25日

Mozart, M. A.: Sonate für 2 Klaviere zu 4 Händen K.v.448

Saint-Saens, C.C.: Scherzo pour 2 pianos à 4 mains Op.87

Gershwin, G.: An American in Paris 2 pianos 4 hands (orignal version)

Debussy, C.: En Blac et Noir pour 2 pianos à 4 mains

Brahms, J.: Sonate für 2 Klaviere zu 4 Händen Op.34b (nach dem Quintett Op.34)

・1990年9月20日

Saint−Saëns, C. C.: Variations for 2 pianos on the theme of Beethoven Op.35

Gershwin, G.: Rapsody in Blue for piano and orchestra

Debussy, C. Prélude à l'après−midi d'un faune de Stéphane Mallarmé (Réduction pour deux pianos)

Debussy, C.: Petites Suite (Transcription pour 2 pianos à 4 mains par Henri Büsser)

Bartók, B.: Suite for two pianos Op.46

・1992年度計画予定

Chopin, F. F.: Ronds for 2 pianos Op.73

Schumann, R.: Six edudes en forme de Canon pour piano à pédals(À 2 pianos 4 mains par C.A. Debussy)

Milhaud, D.: Scaramouche (Suite pour deux pianos)

Saint−Saëns, C.C.: Scherzo pour 2 pianos à 4 mains Op.87)

Gershwin, G.: Preludes (Transcribed for two pianos, four hands by Gregory Stone)

Gershwin, G.: Cuban Overture (Transcribed for two pianos, four hands by Gregory Stone)

Ⅳ　結　　論

*Bartók*の研究については，著者による演奏活動を含めた十数年来の一連の仕事がある。勿論，この小論もその続きの研究である。平成元年度の教育学部紀要[*4]において，教師の「理想音」を学生に指導する方法論を述べた。その一部分を要約する。

“学生が理想音を体得出来たならば，次の「メロディー」，「ハーモニー」，「リズム」の理解の完全なる把握のために「楽譜を正しく読みとる」，「弾かれた音が楽譜に忠実であるかを聴き分ける」ことが大事である。そしてこの2つのことが，*Bartók*または*Reshofsky* より直接習った学生達に，一番強調されたことではないだろうか。学生が音楽院を卒業後，今度は自分が先生になり教える側になった時，教えるための精神的理念および基本的法則をこの「*Piano Method*」が与えたのではないだろうか。さらに別の言葉で述べるとすれば，この「*Piano Method*」の役割は，ハンガリーにおける子供のためのピアノ教則本の指導要領，参考書および手引き書でもある。そこで筆者が発見するのは，ハンガリーのそれぞれの地方から選び抜かれた学生が音楽の上達を求め，ピアノの技術を真剣に向上させる事に熱中する若者の姿である。教師のレッスンをつまらなそうな顔をして，ただ時間のたつのを願うだけの学生ではない。彼らは，*Bartók* 教授と肩を並べたい，いまだ世界の人々に知られていない*Bartók* の技術を懸命に学びとろうとめざし，レッスンに没頭している学生の姿である。そして卒業したら地方に帰り，*Bartók*より習ったこの「*Piano Method*」を参考にして，生徒に音楽の精神（民族の心）を教えるハンガリーの小中学校の音楽の教師の姿を，目に浮かべる事ができる。”

我々は*Piano Duo* をすることによって，“*Bartók* の音楽”この場合は大学教師（筆者）の持っている理想音を，学生により直接的に伝達できると考えられる。

一方平成2年度の論文[*1]において，合奏（*Duo*）の最大の特徴は何かという観点から以下のような研究を行った。少し長冗になるがそれを述べる。

“もともと音楽が社会に存在する最大の理由は，音を通した人間相互のコミュニケーションに他ならないと考える。このように合奏では，まず奏者二人の創造への“意志同調”が基調となっている。そしてこの同調は，決して容易な妥協ではないはずと考える。

人間の手の指は10本で，標準的なピアノは88鍵である。一人10本の指と，二人で20本の指でピアノの音を出す場合を比較して考えても，種々の多彩さが考えられる。倍の音が出せる可能性や，聴衆に伝える印象のダイナミックさなども挙げられる。*Music representation* がいきなり倍になるというよりも，二人の情念の創作する音楽世界の調和の部分の魅力が倍になると考えられる。一人で一台のピアノを弾くときと，二人で一台，又二台のピアノを弾くときでは，同じピアノという鍵盤楽器による音楽でも，聴く人への音楽の *representation* が全く違ったものになる。

しかし，難しい曲を一人で弾くより，二人で弾いた方がテクニックの点でも補間しあう場合も多いし，また二人でアンサンブルをする楽しみもある。*Piano Duo* というのは，手軽に自分達で，*couple*で演奏してみようという発想がその根底にあると考える。つまり，合奏の一番素朴な基本的な*representation* 形体である。

楽器としては，他のどの楽器よりも最高の表現可能力を持つピアノは，多くの人との協力の元で作り上げられるオーケストラの曲を，一人で，または二人で演奏する事も可能である。自ら演奏することによりオーケストラの曲を，より身近に感じることができる。そのような面以外に，*Piano Duo* の最大の楽しさは，下手でも自分

も演奏し，相手と一緒に音楽を生み出していくことにあると考える。本質的には，大きな演奏会場で多くの人々に聴かせるまたは聴いてもらうというよりも，自分達で弾いて楽しみ，少数の気のあった人達が互いに弾いたり聴いたりして楽しむ種類のものといえるのでないかと考える。そこにこそ*Piano Duo* の楽しさ，面白さ，演奏者相互の人間関係ばかりでなく，特定された聴く人（聴衆）との相互のコミュニケーションも生まれてくるのではないか。気張った，肩のこったような演奏会でなく，心から音楽を楽しむという気持ちが生まれ，弾き手と聴きての間の何ら“垣根”のない状態が存在する。”

緒論においてふれた音覚を形成するために，教師と学生の*Duo* が存在し，学生が教師となりまた学生と*Duo* を組むことによって，音楽文化の伝達が脈々と受け継がれるのである。つまり，学問・芸術の伝承方法がここにも表れている。

数学者の小平邦彦先生も次のように述べている。

“さて数学の学び方であるが，数学の本を開いて見ると，いくつかの定義と公理があって，定理とその証明が書いてある。定理を理解するにはまず証明を読んでその論証を辿ってみる。それで証明がわかればよいが，わからないときは繰り返しノートに書き写して見ると大抵の場合わかるようになる。わからない証明を繰り返しノートに写すと言うのが数学の一つの学び方である[*7]”。

以上は数学の学び方であるが，音楽の学び方にも当てはまる。楽譜を見るとよく弾けるかどうか不安であるが，何回もピアノの鍵盤に接して，繰り返し，繰り返し練習すると，ある日突然わかったと言う音覚がひらめく時がある。これの繰り返しで自分の中に音楽が成長していくと考えられる。二人で*Piano Duo* をする場合も，繰り返し，繰り返し練習する期間に，教師と先生の音覚が成長し伝達される。この伝達過程が*Duo* の楽しさであり，演奏会において聴衆はこの*Duo* の楽しさ――臨場感にひたる喜び――を味わうのではないかと思う。はかなく，かそけき感情が会場に充満することこそ音楽家の喜びであり，その為に精進するのである。

最後に，演奏会における*Piano Duo* の魅力は，次のことと対比させることが可能である。舞台演出家が観客達へ見る喜びを与えるために俳優を演出し，舞台と観客の間に演覚をかもしだす。これと対比して述べれば，*Duo* 演奏は，一人芝居でなく二人芝居を，そこで演奏者自身が演出家になり，演覚と音覚を聴衆に提供し，香気を共有する。これが*Duo* の魅力であると考える。

以上を結びの言葉として，今回の小論を終わりにする。

引用文献

1) 吉名重美；「二台のピアノによる実践教育について」音楽教育研究　その諸相　1990 *Oct.* 島根大学教育学部音楽研究室発行
2) Béla Bartók；「Mikrokosmos 」序文　Boosey & Hawkes 発行
3) Benjamin Suchoff；「Guide to Bartók's Mikrokosmos」1983　Da Capo Press.
4) 吉名重美；「ピアノ教則本についての考察　Ⅰ」昭和63年10月　島根大学教育学部紀要第22巻－第1号
5) Béla Bartók ；「Mikrokosmos Vol. 4 」Notes Boosey & Hawkes 発行
6) Béla Bartók ；「Mikrokosmos Vol. 5 」Notes Boosey & Hawkes 発行
7) 小平邦彦編；「数学の学び方」岩波書店発行

参考文献

・Béla Bartók ；「Mikrokosmos」全6巻　Bossey & Hawkes　発行
・Béla Bartók ；「Seven pieces from Mikrokosmos」Boosey & Hawkes 発行
・山崎孝著；「バルトーク　ミクロコスモスの演奏と指導法」　ムジカノーヴァ発行
・千蔵八郎著；「バルトーク　ミクロコスモスへの手引き」　東京音楽社発行
・F. E. カービー著、千蔵八郎訳；「鍵盤音楽の歴史」全音楽譜出版社発行
・Ernest Lubin；「The piano Duet (a guide for pianists) 」　A Da Capo Paperback
・R. ケルターホルン著、竹内ふみ子訳；「ピアノ曲の分析と演奏」　シンフォニア発行

3. PERPETUUM MOBILE

Allegro molto, ♩ = 160

PIANO I

PIANO II

pp

pp

"Seven pieces from Mikrokosmos" より

Perpetuum Mobile

Allegro molto, ♩ = 160

sempre sim.

135

f, sempre legato

sempre sim.

sempre sim.

Béla Bartók "Mikrokosmos" より

5. NEW HUNGARIAN FOLK SONG

Ben ritmato, ♩= 120

PIANO I

PIANO II

mf

mp

(Ped.)

5

10

cresc.

f

p

"Seven pieces from Mikrokosmos" より

New Hungarian Folk Song
Nouvelle chanson populaire hongroise
Neues Ungarisches Volkslied

Ben ritmato, ♩=120

Er - dő, er - dő de ma - gos a
Oh, how high, green for - est, spread your
Fo - rêt, fo - rêt, les ci - mes fort

*127

mp

te - te je, Jaj de ré - gen le - hul - lott a le - ve - le,
high - est tree? How long since its la - test leaf fell si - lent - ly?
é - le - vées, De tes ar - bres, dont les feuil - les sont tom - bées,

Béla Bartók "Mikrokosmos" より

吉名 重美

2. CHORD AND TRILL STUDY

Moderato, ♩. = 80-84

PIANO I

PIANO II

p, leggero

mf, cantabile

p

"Seven pieces from Mikrokosmos" より

Chord Study
Étude en accords
Akkordstudie

Moderato, ♩. = 80-84

69

cantabile

mf

p

simile

Béla Bartók "Mikrokosmos" より